大工・棒削・盜賊之類、長吏として可司之者也。湯屋風呂屋は傾城の下たるべし。沓作・革細工・膠を仕類之者、皆々二十八番の可爲下者也。

鎌倉住藤原朝臣

年月

驛左衛門尉頼兼

右之通、頼朝公御諱之上字を、被下置の御朱印を、今度被出申に付、任舊例相定者也。

享保七年寅正月廿一日被仰渡

一、驛左衛門・善七出入五年以來、度々に御裁許有之候處、善七方より驛左衛門支配にて無之段相論、去る廿一日御評定所へ被召出候由。

驛左衛門

善七一人七

右七人を善七方にて七人者と申候。

二人もの

三人もの

右は非人支配之由。

一、去る廿一日御評定所にて被仰渡候は、五年以來度々御

裁許有之、善七儀驛左衛門支配に無之段相論不届にて、當善七、十三歳幼少にて何事も不存候處、右七人之者共相論、依之七人は驛左衛門へ被下候。驛左衛門より仕置可申付候。右七人の家財隠所に可仕旨被仰渡候處、七人の内一人無念に存じ、御評定所の石垣に頭を打付、舌を喰切相果申由。則驛左衛門方より一人に四人宛相付、評定所の牢輿に乗せ、町與力衆同心押驛左衛門方へ被參候由。享保七年二月九日藤田恭徳より、驛左衛門方へ尋に遣候處、評定所石垣にて頭を打付、舌を喰切候事も、牢輿に乗せ候事も、驛りに御座候。七人の者は驛左衛門へ被下候故、殺害仕候旨、日又二十八番の品に付、金剛大夫一巻の儀も此處には可證候と、不存候。先年の趣に御座候旨申候。

一、驛左衛門方より善七方の屋敷へ、七人の者家財隠所に差遣候處、善七屋敷の内騒動にて、善七は溜りへ立退申出。右屋敷の内門を閉ぢ、内へ一人も入不申出。

二人もの

三人もの

右之者は、七人の者と組不仕候に付、御構無之候。善七幼少に付て、公儀より二人の者、三人の者へ御願被成候由。

鎌倉住人藤原頼兼驛左衛門、寛文七年未三月二日以書付申上次第。

右は二月廿二日、於江戸金剛大夫能有之、廿一日より天氣惡敷、廿八日より又初り、以上四日に成。諸大名衆棧敷八十間許、舞臺・樂屋以下は酒井讚岐守殿御取持、結構成様子に候由。初は無仔細能仕候。大夫より兼て驛左衛門方へ、案内を不遂候に付、舞臺打破候はんとたくみ、廿八日の朝、諸大名衆・町人等貴賤群集の所へ、能初り可申時分、驛左衛門手合の者、五十人ほど召連隨、長刀・肩衣・袴にて舞臺へ上り、犬の皮二十枚積もたせ、使を以て金剛大夫是へ罷出候へ、可申仔細有之、其上相渡物有之候。急度罷出候へと申遣候へ共、大夫出合不申時、御老中御扱被成候に付、驛左衛門退出仕候。能濟候て御尋被成候に付、如此書付差上申由。

穢多より下りの者

- 穢多長吏
- 一番 驛左衛門
- 二番 座頭
- 三番 舞々
- 四番 猿樂
- 五番 陰陽師
- 六番 壁塗師
- 七番 土器師
- 八番 鑄物師
- 九番 辻盲
- 十番 猿引
- 十一番 非人
- 十二番 鉢叩

- 十三番 結揃
- 十四番 土器師
- 十五番 石切
- 十六番 放下師
- 十七番 笠縫
- 十八番 渡守
- 十九番 山守
- 廿番 青屋坪立
- 廿一番 筆結
- 廿二番 墨師
- 廿三番 關守
- 廿四番 鏡打
- 廿五番 獅子舞
- 廿六番 藁作
- 廿七番 傀儡師
- 廿八番 傾城

以上

右の外道のもの數多雖有之、盜賊の輩除之也。

頼朝公より御判有之、隅屋・風呂屋・傾城屋の下に付、人形廻し・淨瑠璃語りは傀儡師の下に付、雪踏作・革細工・膠を仕は皆二十八番の下たるべくもの也。

一、細川三齋の家來加賀山隼人

むかし細川三齋の領地に、地主弓削多新右衛門と云者の下人欠落いたし、御藏所中嶋と云村の、在津庄作といふものの方に隠し置候。此事相知候に付、新右衛門方より庄作方へ、走り下人返しくれとて、度々使越候處、此方へは不參候とて、しかく不及食着候。御藏所の事に候へば、押込み申事も難成、日を送り居候處に、彦山の祭に彼者を、庄